実践報告

ことばの相談室・療育施設・保健センターでの言語臨床を語ってみた

林　耕司[a)]

a 長野医療衛生専門学校　言語聴覚士学科

Talking about language clinical practice in language consultation, rehabilitation and health center

Koji Hayashi[a)]

a Department of Speech-Language-Hearing Therapists, Nagano Medical Hygiene College

要旨：筆者は当学校ことばの相談室・療育施設２カ所・保健センターでことばの相談・訓練に当たっている。相談室や療育施設では対象児は自閉スペクトラム症がほとんどであり、保健センターでの対象児は言語発達の遅れ・機能性構音障害・吃音を呈する子どもたちである。この実践報告では子どもたちの示す様々な言語症状を述べ、それに対して言語聴覚士が子どもや保護者をどのように支援しているかを具体的に示した。ことばの相談・訓練に当たって大切にしていることは次の５項目になる。①発達レベルを正確に評価すること②子どもに合った強化子を見つけて評価・訓練を進めていくこと③相談・訓練の場をお子さんにとって楽しい場にすること④明日の子育てにつながるように現状を保護者に前向きに伝えていくこと⑤必要なケースには小児科の受診を勧めたり、リハビリテーション病院を紹介すること

キーワード：言語臨床　相談・訓練　ことばの相談室　療育施設　保健センター

１．はじめに

私の言語臨床はたとえば次のように始まる。少し語ってみようと思う。今朝はＢ療育園に着いて車から降りて玄関を見ると２歳８か月になろうとするＡ君が玄関の横開き扉に設置された２枚の網戸の中央に仁王立ちし、その網戸を開けたり閉めたりしながらこちらを見ていた。私は網戸が閉まるとすかさず後ろに飛びのき、あららあなどとちょっとびっくりした声を上げた。そうするとＡ君はいきなり声たてて笑ってくれた。何回か同じことを繰り返して楽しんだが、なかなか私が玄関に入っていくことは難しく、彼がすきを見せて網戸が空いた瞬間に中に入っていけた。私が入って靴を脱ぎ「いっしょに入ろうぜ」と声をかけても、お母さんが「お靴脱いで」と促しても彼はそこに立ち尽くしたまま何もしようとせずだったが、保育士のＹ先生が来るとやっと玄関に後ろ向きに腰かけて靴を脱ぐ体制に入った。そして、ようやく中

a 長野医療衛生専門学校
〒386－0012　長野県上田市中央 2-13-27
info@nagano-iryoueisei.ac.jp

に入ってきてかばんの中のタオルやコップや歯ブラシを所定の箱に入れるシーンでは、まずは自分が来たことを知らせる自分の写真を貼ってみる場面になって本人がやらないのでお母さんが貼り付けるとさっと取り去り捨て去った。ことばはまだほとんどしゃべれず発声もなくいつももの静かなA君ではあるが、自分でいやなことはいやと、やりたくないことはやりたくないと行動で静かに主張してくる。かわいらしいがなかなかに手ごわい相手だ。

というふうに私の言語聴覚士（以下、ST と略）としての仕事が始まったりする。今日はどんな時間をどんな子どもと持てるのだろうと期待が膨らんでくる瞬間でもある。私は今 4 カ所で子どものことばの相談に当たっている。当専門学校ことばの相談室、通園療育施設 2 カ所、保健センターである。当専門学校ことばの相談室では主に自閉症スペクトラム障害のこどもたちの言語訓練が中心で一人のお子さんにほぼ月 1 回 1 時間の訓練を行っている。B 療育施設では一人のお子さんに 1〜2 か月に 1 回、C 療育施設では一人のお子さんに半年に 1 回のことばの相談・訓練を行っている。また、月に 3〜4 回実施される保健センターでのことばの相談では主に初めて来られるお子さん（通常は 3 名）の言語発達の相談にのっている。この実践報告では通園療育施設、保健センター、当専門学校ことばの相談室の順に私の行ってきている言語臨床を語ってみることにする。

2．通園療育施設での言語相談・訓練

ある日の B 療育施設での言語臨床を語ってみよう。今日のことばの相談は二人だ。3 歳後半の H 君と 2 歳後半の S 君。最初に H 君とお母さんが相談する部屋に入って来た。一か月前にお会いしたときはじっと席には座っておれず、用意してある教材を触ったり、ひっくり返したり、持っていったりしていたが、今日は実によく着席行動がとれていた。前回お母さんにはだいぶことばも出てきたので、もう少し落ち着けるようになるといいですねという話をしていた。そのためには、何かやってみたいときは「これやっていい？」「これ開けてもいい？」などと大人に許可をもらえることばが使えるようになるといいですねとお母さんには助言していた。また、相手を誘うことばが使えるようになると H 君のやりたいことがわかってもっと落ち着くんじゃないかなともアドバイスしていた。そして今日お会いしてみたら実に落ち着いていた。ちょっと席を離れて私のかばんの中身を見ようとしたり、勝手に教材を持っていこうとしたりすることはあったが着席行動はしっかりとれていた。そして、会話も成立することも多く名前や歳が言えるだけではなくお父さんはどうしたのと訊くと「青ブーブー乗って仕事行った」と答えられていた。このようにことばが増えて、理解力も増し、会話ができるようになってきたことも行動が落ち着いてきたことの背景にはあるようだった。なので、次の目標として自分の行動を律することば「待ってる」とか「我慢する」とかを自分に言いきかせられるようになるともっともっと落ち着くねという話を母にはした。そして、遊びの時間にポポちゃん人形を出すと「ポポ」と言いつつちょっと怖がって最初引いていたが後は嬉々としてミルクを飲ませたり、歯磨きをしたり、お風呂に入れたりを楽しむことができていた。お母さんは動物の人形しか持ってないんですと言ったので、自分と同じような子どもの似姿をした子ども人形にとても興味を持ったようだし、これから出会うお友だちといっしょに遊ぶに当たっても役立つからと説明し買ってもらって遊んでもらうことにした。

次に部屋に入って来たのは 2 歳後半の S 君。初めて会うお子さんだ。小さな積み木を出して積んでもらうと 8 個積め、車やトンネルの形も積み木で真似して作ることができて、鉛筆を電車に見立ててトンネルくぐらせるとにっこり笑って自分でもやってみていた。帽子や車やりんごなどの具体

物が描かれたカラーの絵カードを見てその名称を言う場面では黙ったままで声も出なかったが、並べられた数枚の絵カードから言われたもの、たとえば車などの絵カードを取る課題は気に入ったようで、喜んでやり始め帽子は「おう」、くつは「うう」などとこちらのことばを不明瞭ながらまねして少し言ってくれた。お母さんは3人目を妊娠中。楽しく遊んでいるうちにことばも少しずつ出てくるように思われたので、お母さんには楽しく遊ぼうが大事ですねという話をして終了とした。

別の日、3人のお子さんに会った。一人目は2歳3か月とまだ小さな男の子N君で初めて会うお子さんだった。荷台のついた比較的大きなトラックを抱えて持ってきたので、どんなふうに遊べるのか様子を見ることにした。トラックを手元で左右にだけ動かしているので鉛筆や積み木を荷台に乗せて走らせたり、積み木を荷台から滑り落としたりしてみると興味を持ったらしく同じようにまねして落としてくれた。落とした積み木は並べた後、鉛筆で積み木と積み木の間を切っていた。お母さんに訊くと家では包丁でリンゴなどを切るのは大好きでずっとやっているとのことだった。包丁のイメージで切っているんだと思うと応用力がすごいなと思った。それならばと、次はおままごとを試してみた。家では包丁で切ることしかやってこなかったようなので、こちらが切った果物を皿に乗せたり、切ったものを人形に食べさせたりして見せてみるとこれも上手にまねして遊べていた。そして、次にお人形を布団に寝かせて、こちらもいびきをかいて寝るという遊びを示してみると、なんと驚いたことに椅子から立ち上がって私の横に来て「PIKIPIKIPIKI」と彼にとっては本気の言葉・ジャルゴンでしゃべってきた。「おおい、起きてくれ」とこちらが想像できる要求をしてきた。その PIKIPIKI は私が寝るまねをするたびに繰り返された。見ている私、保育士、お母さんはちょっとびっくりし、またちょっとたまげもした。表出できることばが全くないにも関わらず、こうして相手に自分の要求を言語化できたことに驚いたのだ。最後にお人形をタオルに乗せ左右にブーランブーランと動かしながら人形を落っことすという遊びをやってみると人形が落ちる前から期待感に満ち溢れた顔つきをし、落ちるとケタケタケタと大声で笑い大喜びであった。また、太鼓を出して上からたたいたり太鼓の横腹をたたいたりしてみるとこれも上手にまねでき、拍手を何回かしてあげると1回だけ自分もまねして拍手していた。太鼓の機能的操作の模倣ができ、拍手という身振りの模倣もできることが確認でき、お人形を使ったおままごとも嬉々として楽しめることがわかった。お母さんには興味を持って様々に遊べるのでその時々にしっかりと短い言葉で話しかけをすること、一単位の遊びができたら次に続くような遊びを見せてあげること、たとえば包丁で果物を切ることを繰り返していたら切ったものを皿に入れることも促してみること、またたとえ意味不明なことばであってもさっきのようなはっきりした PIKIPIKIPKI ということばが発せられたらしっかりそのまねをし PIKIPIKIPKI と言ってあげること、いろんなことに興味を持てるからしっかりと1対1で遊んで遊び方のモデルを示してあげること、まだまだ発達に心配なことがあるので小児科の先生に総合的に診てもらってアドバイスを仰ぐことなどを助言してみた。

その1か月後に再び PIKIPIKI 君に会った。今日は a, o と声を出すだけでなくジャーゴンでしゃべってきたのでこちらも負けじとそのジャーゴンをわかる範囲でまねしてみると、PIKIPIKI 君もまねしてきてやりとりが続いた。そして、積み木を出してみると、何と積み木を1センチ間隔ぐらいにきれいに並べ始めた。そして、10種形の弁別も難なくこなし、木製の丸/三角/四角が並んだ3種型に見とれているように見えた。4種型はほっぽって3種型に見入る PIKIPIKI 君を見て、改めて3種型を見つめてみると丸/三角/四角の順にきっちりと並んだ模様が宇宙の整然とした仕組みを表して

いるようでちょっと粛然とした。

別の日、C療育園で3人のお子さんに会った。一人目はH君5歳。ことばでのコミュニケーションがしっかりしてきて、友達の気持ちもだいぶわかるようになってきたので3週後から療育は終了し幼稚園だけに行くことになった男の子だ。今日はH君になぞなぞを出すように仕向けると、「書くものなんだ」と出し、次には「白い靴なんだ」というので、私があれっ答え言っちゃったのと疑問を呈し、この問題の答えは何かと訊くと「上履き」と答えたので、こちらはなるほどなるほどと思った。最後に積み木で作った階段からどちらが遠くへ飛べるか競争したら、彼が勝つたびに大声上げて喜んでいた。そして、これで今日は終わりだと言うと彼は横にいた保育士に「なんで？」と思わず訊いていた。そこでお母さんが「この子、林先生のことが大好きで、今日も本当に楽しみにしていたんです」と言ってくれて、こちらも嬉しいやら良かったやらで今日の相談を楽しく終わらせることができた。もう会えないのは寂しくもあるがこうしてSTの手を離れていくのもの。祝福すべきさようならだと思った。

二人目はK君4歳。事物の描かれた絵カードを見せるとなんとかその名称を言えるが、動作の絵カードを見て動作語を言うことは少しできる程度だ。理解面では事物名称の絵カード取りができ、色が4色はわかるようだ。大好きなのが手に持ったものを下に落とし、拾いまた落とすことを繰り返すこと、特に鉛筆をパラパラ落とすことが好きだ。今日はお母さんと話していると5，6個の積み木を手にして落としては拾って落とすことを繰り返しやっている。家でもこれをやりだすと他のものは目に入らずほとんどエンドレスになるらしい。保育士さんが介入して保育士さんの手の上に積み木を落とし、その積み木を保育士さんにもらって落とすことをやり始めるとこれも長く続いている。お母さんにはこのように子どもとやりとり関係を持ちながら好きな落とす遊びをしてみるといいですねと助言した。また、三つの積み木で作る積み木のトンネルでは一人で構成することが難しかったが、お母さんに子どもの手を持ってもらって二つの積み木の上に置かせると完成できたので、何かできそうな時には必ずお母さんが手をもってやらせてみるといいですねとアドバイスした。要求行動としては「抱っこ」「おんぶ」はことばで言え、絵本を読んでほしくなれば絵本をお母さんに持ってくるとのことで、実物ではなくて絵カードでも要求できるようになるとそこに実物がなくとも要求でき要求の幅が広がりますねという話もしてみた。

3．当学校ことばの相談室での言語相談・訓練

Mちゃんがやって来た。部屋に入るなりマットの上をぐるぐるし始めた。前回もほとんど椅子には座っていられず、立ち歩き、目につかない小さなごみを拾っては口に入れ唾と共に吐き出していた。家にいることが好きで特別支援学校（2年生）に行くのはいやがり、学校に行くと先生が二人がかりで教室に連れて行くそうだ。今日もなかなか座れずお母さんが股の間に子どもをはさんで訓練は開始された。物を穴の中に入れる遊びが好きなのでそれを取り入れた訓練を実施してきていて、手渡された小さなビー玉はペットボトルへ入れ、細長いリングは穴にさすことは少しずつできるようになってきたので、今の目標はペットボトルが提示されると丸いリングではなくビー玉を選んで入れることができるといったような目標で、二つを見比べて行動することができるようになる訓練だ。しかし、まだまだ見比べて選ぶということは難しいらしい。そして、お母さんに抱かれた状態からなんとかして逃げたいために暴れてしまうので、よけいに集中力はそがれてしまっている。そして、彼女は強行突破して椅子から離れてしまったので、机上の課題はあきらめて動きながらやる課題に切り替えた。そして、それが一段落すると

椅子に座らせ、こちらが「パチパチパチ、パチパチパチパチ、パチパチパチ」と声かけながらいっしょに手たたきをするという彼女が大好きな遊びに入った。この手振りと声かけの「パチパチパチ」にはいつも反応が良く、今日もにっこりそしてうっとりとしてくれていた。二、三度自分から真似する手振りもみられた。これで、こちらも調子づき、太鼓をバチで「ドンドンドン、ドンドンドン」とリズムよく叩いてみると笑顔が見られ、バチを渡してみると自分からもたたいてくれ拍手喝采のフィナーレとなった。このMちゃん残念ながらいまだにことばは出てこないが理解力はだいぶ出てきているようだ。お母さんはその辺のところをしっかりと把握されていて、「はみがきするよ」「お風呂入るよ」は嫌いなのですぐに逃げ回るが、「ポッキー食べるよ」にはにっこりと微笑んでくれるから理解がすすんでいますとのことだった。このように「歯ブラシはどれ」とか「ポッキー持ってきて」には従えなくとも、ある状況の中で毎日繰り返して伝えられている内容は理解が進んでいくものらしい。今回のMちゃんのお母さんの発言を聞いていて、お母さんたちに子どもがどれだけ理解しているかを尋ねる時には「あることばを言われてお子さんが笑ったり、いやな顔をしたり、逃げて行ったりすることばかけはありませんか」と訊いてみると日常生活での理解のレベルがわかってくるものだと強く思った。

Mちゃんのその後であるが、着席を何が何でもこばみお母さんが抱っこして座ろうが何しようが同じ部屋に敷かれたマットでくるくると回って遊びたがるようになってしまった。この3年間マットのある相談室の部屋でやってきて着席した訓練が可能であったが、お母さんが「この子マットが大好きなんです」と発して下さったので思い切ってマットのない隣の小さな部屋に移り机を壁に向かって配置し、横に衝立を立てて見える範囲を遮蔽してみたら案の定少し安定して座ってくれた。いわゆる物理的構造化が成功したんだとちょっとほっとして訓練を終えた。翌日には3年生に言語発達障害学を教える授業があったので、着席させるためにどんな手法をSTは用いたか生徒に考えさせたがなかなか答えを見つけるのは困難であった。このMちゃんのこの3年間の経過をたどってみると、始めは来るたびに泣いていた。どんな場所でも慣れないうちは泣いているとのことだった。泣くとお母さんが持ってきたアンパンマンDVDを見せると泣き止んでいた。それが1年ほど経つと入口でじっと僕の顔を見るようになり泣かなくなっていった。そして、テレビでアンパンマンの仲間の一人のテンドンマンを見るとお母さんの所にいって手をつかみテンドンマンの歌を歌ってくれるように要求したり、アンパンマンの絵本も見るようになっていった。学校では先生たちの顔も見分けられるようになり、お風呂入るよ、トイレ行くよと毎日繰り返される行動のことばでの指示も理解するように成長してきた。

次はスーパー一人遊びをした5歳のR君を紹介しよう。まずは彼と今日はどんなおままごと道具をもってくればいいのかというやりとりをした後の会話から紹介する。ST「お名前は？」R「おだまごと」ST「何歳？」「おだまごと」というように構音障害のある「おままごと」の遅延反響言語が続き、次にはST「今日は何に乗ってきた？」R「バイク」（ママに乗せられて自転車で来たらしい）、ST「お誕生日は？」R「８」（８月は正解）などとうまくやりとりが続いた。部分的にこちらがあて推量をしながら会話を進めていく必要のあるR君だ。そんな彼が今日はお買い物ごっこの売り手と買い手になれるかなと思い買い物ごっこをやってみた。これが意外なほど上手にことばを使いこなせ、びっくりもし頼もしくもあった。買い手であれば「～下さい」売り手であれば「いらっしゃい」「ありがとうございました」を見事に混乱なくすっきりと使いこなせていた。というところで僕はお母さんと日常での彼の様子を話し合うことにし、彼を一人のSTS学生に任せて自由に遊ばせた。始めはミ

ニカー2 台を渡したが円を描きながらぐるぐる駆け廻ったり、車同志をぶつけたりしながら遊んでいたので、車が少ないので遊びづらいのかなと思って消防車など他の車 6 台を渡してみたが学生の声掛けには反応なく一人でなにやら声をだしながらぐるぐる廻っていた。それを見ていたお母さんはこれは家でも一人でやっている「スーパー一人遊びです」と言ったのでまさにまさにスーパー一人遊びとはよくも言ったものだと思った。買い物ごっこというきちんとした枠組みがあれば遊びがきちんと成立するのに、枠組みがとっぱらわれた自由遊び状況では想像力を駆使して遊ぶのが難しくなりスーパー一人遊びになってしまったのだと考えられた。なので、お母さんにはお子さんの遊びに少し介入して「こうしたらどう」と提案しながらいっしょに少し遊んであげるのも発達を促すには必要だねという話をした。

別の日、自閉スペクトラム症で特別支援学校 1 年生の K 君がやってきた。お母さんはとっても真面目で相談室では私といろんなことを話し合う中で家庭で K 君とよりよく過ごすヒントを見つけたいと思っていらっしゃる。S-S 法言語発達遅滞検査で評価するとT群にあたるお子さんで単語レベルの理解は成立しているが音声発信が未習得で、なんらかの発信行動を身につけさせたいと思って相談・訓練にのっているお子さんだ。まだ、トイレの自立ができていないお子さんだが先日お母さんと話していると一人で遊んでいた k くんが突然何かを投げたように見えたのでお母さんが「アッ、うんちです」と言いながらそれを取り上げに行かれたのでこちらはびっくりしてしまった。お家でもたまにそんなことがあったとお母さんの話は続いていった。トイレに行って落ち着いたあとも今回は少しぼおっとしていて絵本を読んであげてもあっちを見たりこっちに視線を移したりで注意を絵本には向けられない。そんな K 君に帽子と歯ブラシのジェスチャーを教えるために抱き人形を出すと目や口をぐりぐりと触ったあとはさかんに上手に抱き人形の唇にキスを繰り返していた。とてもほほえましい光景でお母さんも「どこでこんなこと覚えてきたんでしょうね」と笑いながらつぶやいていた。音声発信は口型をしっかり見せると模倣が可能になっているが自発の音声発信はとても難しいお子さんで、発信は身振りであれ音声であれまだまだ獲得が難しい。

さて、翌日にやってきたのは二人のお子さんだ。一人目は 2 か月に一回やってくる A ちゃんでちょうど昨日 5 歳になったところだ。今日は 5 回目の訓練日。今見ている中では最も落ち着きがなく集中力も短い A ちゃんだったが今日は童謡を口ずさみながら入ってくるといきなり着席できた。初診のときは入室したと思うと相談室のなかをふらふらし始め壁に貼ってある果物を見て「洋梨、りんご、すいか、みかん」とはっきり大きな声でいい、棚においてあったおもちゃをいじったり倒したりしはじめ、こりゃあおもちゃが見えているとちょっと大変だと思ったので全部片づけてから対応した。また、1 分経ったら大きな音でジリジリ鳴るタイマーを持ち込んできたので、鳴るたびにそのタイマーを押して切っていた。課題を遂行することはできずお母さんから A ちゃんの日常行動を聞くことに終始した。そんな A ちゃんが今日はいきなり座り、ペグ差し・型はめ・事物名称の絵カード理解・動作絵カードの理解などを実施することができた。ただ集中している時間は短く途中で立ち歩こうとしたりするので一つの課題が終わるたびに休憩をとって自由にさせた。最近はでんぐり返りが気に入っているらしく、「でんぐり返り」と言いつつお母さんに手伝ってもらいながらでんぐり返りするのが休憩中のご褒美になっていた。お母さんの最近の気がかりは何に対しても「これ誰」と質問してしまうこと。「これ何」と質問ができてきていたのでお母さんが「これ誰」も教えたらすべての質問が「これ誰」になってしまったとのこと。

これを修正して直すのはなかなか難しいと思われたので、自然に「これ何かなあ」と返しつつ様子をみることにしましょうということにした。

次は特別支援学校3年生のK君。やったね、K君とうとうやったね。僕にとってはうれしいクリスマスプレゼントになった令和6年最後のセラピー。4年かけて言語発達の段階をふるい分けレベルから選択レベルへ這い上り、今回初めて次の段階の身振り記号の受信ができた。1/2選択で帽子と歯ブラシの身振り記号を見分けて実物の帽子と歯ブラシを取ることが出来たのだ。また、お母さんから自分の青いバックと双子の兄のS君のグレーのバックを見分けているという話を聞いていたので、プラステンで5種の色分けを実施してみるとほとんど誤りなくできたのでこれにもびっくりしてしまった。今までの訓練の積み重ねとお母さんや学校の先生方の努力が実を結んだと考えられた。しかし、ずっとやってきた形の見分けは○△□の3種類でも試行錯誤の段階で4種類になるとまだまだ困難である。また、行動面でも学校で寝てしまうことも多くなりディスパダールが処方されるようになった。また、訓練場面ではマットに寝てしまい起き上がろうとせず、強化子になるチョコを見せるとなんとか起き上がり椅子に座り、強化子を与えながらの訓練続行になっている。双子の兄のS君は最近人形が好きになり盛んに顔を近づけて触ってみている。彼は音楽が好きで童謡を聞きながら遊んでいることが増えたようだ。訓練場面では机に顔を伏せて拒否することも増え、何より強化子が必要だ。最近はクーゲルバーンが気に入りこれが報酬となってなんとか訓練が続行できている。

4．保健センターでのことばの相談

今日は月に3～4回実施されている保健センターでのことばの相談に出かけた。午後から開かれるこの相談の枠は3枠あり、一人の相談は1時間である。今日の相談で印象に残ったお子さんは4歳前半で年少の女の子だった。お母さんの主訴は「3か月ほど前から吃ってしまう。どうしたらいいか」というものだった。お母さんがスマホに吃っているときの音声を録音してきた、子どもには聞かせたくないというのでお子さんはお父さんと待っていてもらって、お母さんとまず会って録音を聞かせてもらった。その録音は「ア、ア、ア、アンパン」というアンパンマン人形を要求するときの語頭の音を軽く連発する声だった。これだけ聞かせてもらっただけでそのお子さんの状況がのみ込めたのでお母さんからはお家での様子や幼稚園でのことを聞かせてもらった。それによると、「ア、ア、ア、アンパン」と言ってしまったときに「わたしうまく話せない」と訴えたということがあり、その翌日は母音「お」のつく単語「おかし」を車の中で練習しだし、始めの音の「お」を強く言えばうまく言えると言いながら納得したようだったとのこと。幼稚園は楽しく通っているが当番などの一人での発言はできず声を発しない、パパは大好きで兄弟とも仲良く過ごしている、家では元気だが外に出ると緊張しやすく3歳児健診ではひとことも口をきけなかったとのことがわかった。お子さんの様子がだいぶわかったのでお父さんと共に部屋に入ってもらった。顔も体も緊張気味であったが、積み木遊びで積み木を高く積んだり車やトンネルを作ったりには応じてくれた。ただ、積み木で作った車を押していくというシーンでは手を出せないままだった。ちょっと気持ちがほぐれてきたところで事物名称が描かれた絵カードを見せて「これ何かな？」と問うてみたが声を出そうとしないので、「じゃあ、お父さんとお母さんともいっしょにやろう」と提案して、お父さんお母さんにまず言ってもらい次にMちゃんということにすると小さな消え入るような声ではあるが言ってくれこれを繰り返すことで全部言えた。吃る症状は全くみられず流暢に言えていたが、発音はカ行はタ行に、サ行はチャ行に置き換わって発音していて機能性構音障害が認められた。たとえば「かさ」は「たちゃ」、「さかな」は「ちゃたな」のようになっ

ていた。その後、ちょっと緊張がほぐれたらしく、名前や年齢や通っている保育園も流暢に答えられていた。お父さんには先にお母さんにお話ししたMちゃんと関わる際に気に留めておいてもらいたいことをお話しして終了とした。たとえば、ゆったりとした気持ちでお話を聞いてあげること、言い方をとがめたり矯正しようとしないこと、力まずに語頭の音を繰り返しているのは心配いらないこと、話し方のことは忘れて楽しく遊んであげることなどをお話しした。また、習っているピアノの先生は挨拶に厳しいとのことだったので、母音ではじまる「ありがとうございました」のお礼の言葉は言わずに退出したいなどをきちんと先生に伝えることなども重要なことだと思ったのでそのこともお話しした。今日の初面談でだいぶ僕に慣れてくれたがやはり最後のあいさつは苦手らしく黙ってバイバイをした。

次はお母さんとやってきた3歳前半のY君。このところ随分ことばが出始めてきてお母さんも少し安心しているところらしい。構音はとても不明瞭でお母さんにもわからないことがまだまだあるが、しっかりと2語文でも話せていた。上に発達障害の兄がいて、下にも赤ちゃんが産まれてお母さんとしては大変な状況でも愛情あふれる接し方をしていることが読み取れた。話の最後にお兄ちゃんといっしょにテレビに落書きされたのには本当に腹が立っておもいっきりしかってしまった話をされたので、「そうだね！賛成！思いっきりしかりとばしてお母さんの気持ちをすっきりさせるのも大切だね。僕も加勢するからそのときは呼んでね」と笑いながら激励した。だいぶ言葉も出てきて発達してきていたので保育園を訪問した発達相談員は遠慮しながらお母さんに保健所でのことばの相談をもちかけたようだが、相談が終わってどうでしたかとお母さんが発達相談員に尋ねられると「来てほんとうによかったあ」という返事だったそうだ。僕が保健所でのことばの相談や療育施設での相談で心掛けていることは「子どもに少しでも楽しんでもらうこと。お母さんが安心して子育てに取り組めるようにプラスの方向でお子さんの発達を説明すること」である。こちらが気持ちよく楽しく終われたと思うときは今日の様にお母さんの気持ちも極上のようである。親子が短い時間であれ楽しむ場だっただろうと思える場を提供すること、これが大切なことと思っている。

そして別の日、相談は3人。一人目は1年ぶりに会う5歳の男の子だった。1年前は難発が頻発していて苦しそうに話していた。会って話してみるとあれっ、スムースに話すなあと思いながら話していると長い表現でも名詞の呼称でもまったく吃ることがなかった。ひとしきり会話して様子をみた後でお母さん、お父さんと話してみると、2か月前の運動会前後は全くことばが出てこなくなることもあったらしい。この1年、行事など特別なことがあると吃音が悪化しているとのことだった。お家の方には様子をみてもらうことにし、学校に入るにあたって吃音が続いているようなら、学校に事前に伝え環境的配慮が必要になった時にはクラスの中で孤立したり悲しい思いをしないように環境を整えてもらえるように学校側に要望しておきましょうと伝えて今回は終了とした。

次は5歳7か月の初診の男の子。一年前は保育園では前に出て当番の挨拶は全くできなかったが、今は他の子といっしょに当番の挨拶はできるようになった。しかし、友だちとトラブった時には我慢してしまい友だちにも先生にも何も言えず、お母さんが迎えに行くと車の中で大泣きし友だちにおもちゃ取られちゃったことを訴えているとのこと。今日は僕にはすぐに慣れて話し始め、絵カードの名称ははきはきと答えてくれるが、会話になるととたんに答えてくれなくなった。が、できたら積み木をご褒美にあげることにしたら答えてくれるようになった。このように子どもの能動性を引き出すために報酬が有効になる場合も多い。文

字の読み書きや数の理解、数字の音読・書き取りは難なくでき、音韻抽出もできていた。お母さんには帰るとき「初めての人にこんなに懐いたのは初めてです」と言われた。私も保健センターでは年間 120 人以上の子どもと会ってきており、自然とこどもになじむ態度が形成されているのだと思った。楽しくリラックスを心掛けている。

5．ことばの相談・訓練に当たって大切にしていること

① 発達レベルを正確に評価すること。

② 子どもに合った強化子を見つけて評価・訓練を進めていくこと。

③ 相談・訓練の場をお子さんにとって楽しい場にすること。

④ 明日の子育てにつながるようにお子さんの現状を保護者に前向きに伝えていくこと。

⑤ 必要なケースには小児科の受診を勧めたり、リハビリテーション病院を紹介すること。

以上 5 つのことを大切にしながらことばの相談・訓練に当たっている。

利益相反の開示

本研究に関する利益相反はない。